



1977年4月10日、チェロを始めて2ヵ月で出演した最初のコンサート。前列右から2番目で、まだ自分の椅子がないため、ミカン箱に座っての演奏だった

スズキ・メソッドの卒業生は、いろいろな分野の第一線で活躍している。今回登場していただくのは上野達弘さん。最近のインターネットの普及で急に身近になってきた著作権の問題。上野さんは、日本ではまだ日が浅い知的財産法、中でも著作権法を専門として研究しているらしい学者だ。早稲田大学で教鞭をとるかたわら、官公庁や弁護士からの相談と、引っ張りだこ。そして5歳で手にしたチェロを、人生の糧、大いなる楽しみとして、43年間、片時も離さずにきている。

## 研究とチェロを両輪にして

◎先輩、こんにちは

# 上野 達弘

Tatsuhiko Ueno

偶然出逢ったのが、  
チェロだった

3人兄弟の末っ子。お母さんの淑子さんがピアノを弾かれることもあり、上の2人は自然にピアノを始め、スズキ・メソッドの教室に通っていた。さて、3番目は、という時に「同じ楽器はしたくない」という本人の意思で「ではヴァイオリンを」ということになり、当時住んでいた神戸の教室を訪ねる。ところがヴァイオリンは定員が一杯。その教室の藤田史子先生に「男の子だし、5歳ならチェロをやってみたら」と言われた。ちょうど合奏練習で、チェロの生徒もいた。「それでどうも『やる』と言ったらしい」ということで、何度か見

学を重ね、野村武二先生の芦屋教室に通い始める。

野村先生は、カザルスのようにパイプをくわえた、物静かな先生だった。当時のレッスンを録音していたテープを聴くと、おっとりとした口数が少なく、沈黙が多い。練習してきた曲を得意になって演奏すると、全部弾き終わるのを待って「あのね…」というように教えてくださったと淑子さんは振り返る。毎日の練習も「5歳なのだから5分でいいよ」「環境が大切だよ」と。だから上野家では、自然体で少しずつ、できるだけ毎日練習した。お客様がいらした時などは、テープを聴くだけですませるといふように、気張ることはなかった。何より家族は、家に新しくチェロの



88年7月に行なわれたDDRツアーでは、指揮の小林武史先生や仲間たちとともに東ドイツ各地を演奏旅行。当時の仲間たちとは現在も交流が続く



音が入ったことを、とても喜んだそう。淑子さんも、自分の知らない楽器を、一緒に楽しんで勉強した。「ある程度の時期まで、ピアノで彼の伴奏をするのは、私の楽しみでした」

ただし、だんだん進んでくれば壁も高くなる。「特に新しい曲に移る時は大変ですから、それだけ事前の準備も必要でした。でも、うまくできた時の喜びも大きくて、そちらが増していったでしょう」と淑子さん。オーディオ好きのお父さんも、カザルスレコードを買ってきたりと協力してくれた。

その頃の一番の思い出は、81年に鈴木先生が大阪の池田市民会館に講演にいらした時、ピアノトリオを演奏したこと。「ロンドンデリー・エア」など短い曲だったが、アンサンブルの楽しみは、11歳の少年にしっかり植え付けられた。当時、熱心にアンサンブルを勧めていた野村先生はすでに体を壊し、この数日後には亡くなられてしまう。

### 朋亨先生とともに

教室は、10チルドレンの世界ツアーに4度参加したこともある息子さんの朋亨先生が継がれた。朋亨先生は17歳でパリ高等音楽院に留学し、アンドレ・ナヴァラに師事して戻られたところ。当時のチェロ科は、教本も6巻までしかなく、ポツケリーニのコンチェルトで卒業だったが、その2楽章から朋亨先生に引き継がれた。「生徒たちは親父の遺産ですから」と朋亨先生が話すのを淑子さんは聞いている。

ただし、親子でも指導のスタイルは全然違った。こういう音色を出すためには、弓の持ち方も変えないと、曲想はと、何もかも専門的で、淑子さんは後ろで聴いていて「うちの子にできるのかしら」とハラハラしたそう。でも、目の前でバリバリと



82年4月4日の卒業演奏



2日前から2人の男性が、10月11日の演奏会の後、左から野村先生、鈴木先生の笑顔の写真だ

弾いて教えてくれる若い先生は、どんどん引張っていつてくれた。またそれについていくだけの力ももう蓄えていたのだろう。

翌年の日本武道館での卒業式で、チェロの研究科で最年少の卒業生ということで、代表で鈴木先生から卒業証書をいただいた。ぶらぶらと会場を歩く鈴木先生に、ワーツと寄っていくと「はい、握手」と言っ

皆に握手をしてくださった。そして「握手したから毎日練習するんだよ」「練習しない日は食事をしない日」「前にやった曲で練習しなさい」と、いろいろな言葉をかけてくださったのが耳に残っている。

### 学生時代はチェロばかり

中学生の時はテニス部に所属し、東灘区で優勝するほどだったが、とにかくチェロが好きだった。ヴァイオリン科の先生に声をかけてもらい、合奏のお手伝いに行くようになると、同じ年代のヴァイオリン科の生徒たちがいて、とても新鮮で一層楽しくなった。

神戸高校時代には、82年、85年、88年と3回あった、スズキのDDR（東独）演奏旅行の3回目にも、参加している。小学5年生から高校生までが、田舎の教会で演奏するという貴重な体験をしている。「初めての海外旅行でしたし、いろいろな世代で、土地の人にも歓迎してもらって、あ

れは楽しかったですね。一緒に旅行すると仲良くなるし、今でも同窓会をしています」。

「チェロの道に進みたい」と言いたし、両親をあわてさせたのも高校生の時だった。

ともかく、受験ぎりぎりまで朋亨先生のレッスンに通いながらも、難関、京都大学に合格。名門で知られる京大オーケストラでも首席奏者を務めるなどしたが、スズキの先生方が呼んでくださった、合奏やアンサンブルで演奏することが、やはり楽しかった。チェロを弾く人が少なく、結婚式のアルバイトや、プロのオーケストラのエキストラ、ユースのオーケストラと引く手あまた、広い範囲で活動できた時だった。

### 研究者への道

チェロ三昧の毎日も、4年生になり、同級生が就職活動や国家試験にと進路を決めていく中で、これといった希望もなく、とにかく2カ月の猛



上野 達弘 (うへのたつひろ)

1971年東京生まれ。5歳の時、故野村武二先生(梅田支部)の下でチェロを始め、81年より野村朋亨先生に師事。88年、DDR(東ドイツ)演奏旅行に参加。90年、神戸高校卒業、京都大学法学部入学。92年、このえ弦楽四重奏団を結成。93年以降、フランス音楽アカデミーに参加し、フィリップ・ミュレー、クリスチャン・イヴァルディらのレッスンを受講。94年以降、アマデウス弦楽四重奏団、バルトーク弦楽四重奏団らの公開レッスンを受講。成城大学法学部専任講師および立教大学教授を経て、13年より現職。現在、早稲田大学法学学術院教授のほか、著作権法学会理事、文化審議会著作権分科会専門委員

● 知的財産法には特許法、商標法などの法律が含まれるが、中でも著作権法は楽譜やCDをコピーする、新作を演奏するなど、音楽をする上でも、とても身近になっている。才能教育研究会から2007年5月に発刊された「音にいのち在り」についても、上野さんの意見を伺っている



「このえ四重奏団」10周年記念の演奏会風景。「このえ」という名前は、京大に面した「近衛通り」に由来する。ヴァイオリンの上田浩之さんは神戸の放射線科医。大西秀朋さんはプロ奏者として活動しているし、ヴィオラの竹内賢司さんは名古屋で高校教員と職業も、住む場所も違う。上田さん以外の3人がスズキ・メソードの出身だ

勉強で大学院に進む。そして恩師辻正美教授の「キミはチェロ弾くし、音楽好きやし、著作権法やりい」の一言で、初めて方向が見え始める。もちろん、音楽に大きな関わりがあることは魅力的だった。当時、著作権法をはじめ、知的財産法を専門にしている研究者はほとんどいなかったが、辻先生は「これからは家族法

### 現在進行形のチェロ

大学2年生の時、名古屋のスズキ・メソード出身で、ヴィオラ奏者の竹内賢司さんと、京大オーケストラの

と著作権法」と、二人の院生の一人に家族法を、上野さんに著作権法を引き継がせた。なんとという先見の明だろう。  
ところが、博士課程も後期にさしかかった頃、本人いわく「相変わらずチェロの合間に研究をするようなぬるま湯のような日々」から放り出される時が来る。突然、辻先生が亡くなられたのだ。やむなく、当時教授になったばかりの山本敬三先生が最初の門下生として、引き受けてくださる。そして厳しく面倒を見ていただいたおかげで、研究者としての道が開けてきた。

自身の回想録に「その気にさせてくれる先生と厳しくしてくれる先生がいてくれたから、今の自分がある」と書いている。それはチェロの道も同じ。野村先生、朋亨先生、しかりだった。ただ、それは運ではない。自ら引き寄せるもの、ここ一番の集中力や底力、そして人柄ではないだろうか。

先輩2人とカルテットを組んだ。それが「このえ弦楽四重奏団」の始まりで、若干メンバーが替わったが、京都や名古屋で20回の演奏会を重ねながら、今も現役だ。目指しているのは「人前で演奏する愛好家」。神戸、名古屋、東京と離れて忙しく働きますが、月に一度は練習するように心がけ、著名な演奏家の公開レッスンがあると聞けば、無数に受けてきたと話す。「公開レッスンは、発表の場でもありませんから」と。中でもバルトーク弦楽四重奏団のレッスンを10年間で5回受けている。バルトーク弦楽四重奏団のメンバーが楽譜に忠実に演奏し、その中で表現していく

### 身近になった知的財産法

そして現在、辻先生の予見通り、2006年に開始された新司法試験では「知的財産法」が選択科目の一つに入るまでになった。つい20年前まで、大学にも知的財産法の講義はなかなかなかったくらいなので、まだ研究者は多くはない。だから、上野さんは今、最前線で、研究や指導、講演と、第一人者として活躍されている。

日本では著作権法研究の歴史は浅いが、ドイツでは100年以上前から盛んであり、音楽著作権の歴史やメロディの保護についての文献もあるという。「本当は音楽著作権の歴史など、研究したいことはたくさんあるので、でも、今はとても暇がありません。目下の目標は、著作権法全体の体系書を作り上げることです」。

日本でも、「著作権を死後50年から欧米並みに70年に引き上げられたら

こと、今でも4人でメトロノームをまん中に練習している姿など、学ぶことは多かったそうだ。「このえ弦楽四重奏団」もそうやって、目標を持って、常にブラッシュアップしながら続けているところが素晴らしい。上野さんは、忙しいスケジュールの中で、夜中にサイレントチェロで練習に余念がない。

長く楽しむために大切なのは、子どもの頃にしっかりと基礎を身につけておくことではないだろうか。そうすれば、上野さんのように一生楽器は友だちでいてくれる。「よくぞチェロを始めた、と思うのですよ」という言葉に実感がこもっていた。